

東日本大震災ボランティア体験報告

濱 雄 亮

要 旨

2011年5月14日に研究仲間5人で行った石巻市内でのボランティアについて、その背景や課題、具体的な活動内容を体験に基づいて報告する。まず、ボランティア一般について概観する。次に、当該ボランティアへの参加の経緯、作業の内容（家屋内の泥かき出し）とそこで人間関係や事後の所感について報告する。最後に、本活動のボランティア活動全体における位置づけを探る。

キーワード：ボランティア、東日本大震災、ボランティアの種類、ちょボラ

1. ボランティアとは⁽¹⁾

1.1 ボランティアの歴史

ボランティアとは、一定の理念に基づいた社会奉仕活動、及びそれに参加する人を指す。「一定の理念」には論者ごとに多少の異同があるが、自発性・無償性・公共性・先駆性・福祉性などが挙げられる。

ボランティアの淵源は、16世紀イギリスの都市における貧困問題などに対処しようとする自助グループの発生に求められる。19世紀になると団体組織されることも増え、アメリカなどにも波及する。20世紀に入ると、コミュニティケアの運動や実業家からの資金援助の獲得、財政の逼迫に伴いボランティアを支援する制度の拡充なども起き、欧米においてはよりいっそう盛んになる。

日本におけるボランティア前史はどのようになっていたのか。まず、前近代においては地縁や血縁による相互扶助や各種の講や寺院による慈善事業などがなされていた。次に、近代以降においては、19世紀末に欧米の影響を受けてセツルメント運動の考えが導入され、国家・行政による一定の支援もみられるようになった。戦後にも引き続き救貧事業や青年団活動、各地の社会福祉協議会や老人クラブによる活動が行われていた。さらに、1960年代以降には欧米と同様に政策的な支援も行われるようになった。そして、記憶に新しい事柄としては、1995年に起きた阪神淡路大震災を機にしたボランティア活動の量的・質的普及がある。

サイバー大学授業サポートセンター・ティーチングアシスタント

原稿受付日：2011年9月11日

原稿受理日：2012年1月30日

1.2 ボランティアの分類

ボランティアは、現在では非常に広範な担い手・対象・方法からなる。そのため、その分類には、以下のような複数の軸を組み合わせる必要がある。

- 領域と対象 (社会福祉、環境、国際交流、文化・教育・学習、保健医療、平和、安全・防災、その他)
- 担い手 (社会福祉セクター、営利セクター、非営利セクター)
- 活動形態 (対人支援、情報収集・提供・交換、交流・交歓・訪問、啓発・教育・学習、調査・研究、専門知識・技術の提供、陳情・交渉・運動、収集・募金、献血・献体・臓器登録、その他)

今回の活動は、個人として、石巻市のボランティアセンターに登録して家屋内の泥かき出し作業を行った。「安全・防災」領域の作業に、「社会福祉セクター」に参加する一ボランティアとして、「労務の提供」という活動形態で参加したものといえる。しかし後述するように作業を終えて東京に戻ってから自分が見聞きしたことを周りに伝えているので、「広報・情報提供」の側面ももつ。こうした多面性は、ボランティアの複雑性を表しているようにも思われる。

2. 活動の概要

本章では、5月14日に行った石巻市内の家屋内の泥のかき出しのボランティア活動の参加の経緯と日程、及び実際の活動について述べる。本活動は、以前から親しかった研究仲間の呼びかけに応じた5人で行ったものである(うち1人は現地集合)。なお、専門分野は文化人類学・社会学である。

表1 日程表

日 時		事 項
5月9日		メンバー確定。 各自、地元の社協でボランティア保険加入。 経験者が、服装・持ち物のアドバイス画像をメールで回覧。
5月10日		西日本の研究者からマスクなどの物資の提供を受ける。
5月13日	23時半頃	レンタカーで東京を出発する(4人)。
5月14日	5時頃	石巻ボランティアセンター(以下、VC)到着、車内にて仮眠。
	8時頃	VCにて、ボランティア登録
	9時頃	活動開始
	16時頃	活動終了、VCに戻る
	17時頃	VCを発ち、宿泊先へ
	19時頃	仙台市内の宿泊場所に投宿(4人)。

日 時		事 項
5月15日	9時頃	仙台市内在住のメンバーと合流し、仙台市近郊の温泉へ
	13時頃	仙台市内に戻る。
	14 - 18時	東北人類学懇談会（東北学院大学）に参加する。
	18時頃	レンタカーで仙台市内を出発。
	23時頃	都内到着、解散。
5月17日		非常勤先の授業にて本活動の内容を紹介する。
5月19日		非常勤先の授業にて本活動の内容を紹介する。

2.1 準備

まず、ある人類学関係の研究会のメーリングリストにおいて、5月15日の東北人類学談話会の参加と14日のボランティアへの参加を誘うメールが出された。このメンバーは筆者の顔見知りであった。既に研究とは別の縁で石巻でのボランティアをしたことのあるメンバー1人を含む4人がこの誘いに応じ、5月9日にメンバーが確定した。現地で合流する予定の1人を含めた5人は、既にほとんどが顔見知りであった（東京から行く1人と現地で合流する1人が互いに顔見知りでないだけであった）。

5月9日にメンバーが確定した後、持ち物や準備についてのメール連絡が行き交った。石巻でのボランティア経験のあるメンバーより、現地での望ましい服装・装備についての図と⁽²⁾と、それらの装備の必要性などについての実際の経験に基づくアドバイスが回覧された。また、13日夜から15日夜までのラフな行程表が提案された。仙台に住むメンバーからは、14日の宿泊場所についてのアドバイスがあった。それを参考にしながら、著者がホテルの予約をした。なお、経験のあるメンバーはすでにボランティア保険に加入済みであったが、その他のメンバーはこの日に各自の住所地の社会福祉協議会にてボランティア保険への加入を済ませた。

5月10日には、上記のMLに参加していたためにこの呼びかけを知っていた西日本在住の研究者から、防塵マスク・防塵マスクの取り換え用のパーツ・バンドエイド・雑巾・眼鏡ふき・お菓子が提供された（元々面識のあった呼びかけ人の住所に人数分送られて来た）。

2.2 前日（5月13日）

東京から参加する4名は、その日の仕事を終えてJR立川駅に集合し、予約していたレンタカーを借りて高速道路で現地に向かった。お互いの服装・装備をごく簡単に確認し合い、コンビニで翌朝・昼の分の食事と水分を購入した。運転は2人が行った。

2.3 当日（5月14日）

早朝5時頃に石巻市ボランティアセンター（石巻専修大学構内）に到着した（図1）。活動にはボランティア登録が必要であるが、窓口が開くまで車内で仮眠することとした。

8時頃に窓口にて登録を済ませ、登録証を交付された（図2）。これを服の見えやすいところに貼ることで、登録されたボランティアであることが証明でき、初対面の人同士が作業している最中に緊急事態が起こっても呼びかけて危険を回避することができる。

登録証を腕に貼って他のメンバーの登録を待っていると、「どこかのチームに入っているか、一緒に作業しないか」と呼びかけてくる男性がいた。著者は初めてこのボランティアに参加したため勝手が分からず、参加経



図1 ボランティアセンターの様子



図2 ボランティア登録証

験のあるメンバーに聞いてみることにして、男性への回答を保留した。参加経験のあるメンバーによると、ボランティアセンターに寄せられた作業依頼は「ニーズ表」という用紙にまとめられており、「チーム」ごとに何枚かの「ニーズ表」をもってその日の作業に当たるとのことであった。そのため、呼びかけてくれた人のチームに4人全員で入れてもらえるのであれば入ろうということになった。このことを伝えるとチームリーダーは了承してくれたので彼のチームに入った。既にこのリーダーのもとで何日か作業をしている人たち数人と一緒に、車3台に分乗して現場に向かった。車内で、作業に従事して何日目であるか、どこから来たかなどをお互いに話す。

午前中に1軒、午後に2軒の作業を行った。1軒目での作業は、家の敷地内や床下に入り込んだ泥のかき出しである。まずスコップで掻き出し、次にその泥を空の土のう袋に入れて、ある程度集めたら車や一輪車で最も近い集積場所に運ぶという流れであった。このため、泥を掻き出す人と、土のう袋の口を開



図3 作業現場近辺の様子

けて準備して土のう袋が一杯になったら口を結んで車や一輪車まで運ぶ人の二人一組での作業が基本であった。床下の作業のためには床板を切ることも必要であるが、これはそうした作業に慣れた人のみが担当した。

1時間ほど作業を行った後、リーダーの指示で20分ほどの休憩となった。日光を遮るものが無く、また作業着を着込んでいるため汗を大量にかくので、水分・糖分・塩分の補給を行う。このペースは午後も同様であった。

2軒目の作業も同様であった。3軒目は、住人がその時点で既に住んでいる家での敷地内(庭)の泥のかき出しであった。この際には、住人からペットボトルのお茶の差し入れがあった。これはとてもありがたかったと同時に、気を遣わせてしまっていることに心苦しさも感じた。

3軒目の作業を終えると、「5時までに作業を終えてボランティアセンターに報告に戻らなくてはならない」というルールがあるため、リーダーの指示で戻ることとなった。ボランティアセンターに戻ると、自分たちは一日のみである旨をリーダーに告げ、その場で他のメンバーとも別れた。以上で、ボランティア作業は全て終了である。

仙台市内に宿をとっていたため、市内まで自分たちの車で戻ることとなった。そこで、津波の被害の様相を自分たちの目で見てみたかったため、沿岸部を縦貫する国道45号線を通って仙台市内に向かった。道路は走れる状態であるが、大量のガレキが道路の両側にあり、直接の被害と住民が受けた衝撃の大きさを思わずにはいられなかった。仙台市内は、一泊だけの宿泊客の立場から見ればいたって平静であり、節電のために明かりが少々控え目であることを除けば、飲食店・小売店は通常通りの営業をしているように見えた。

2.4 翌日(5月15日)

この日は、仙台在住の1人のメンバーと合流して、午前中は仙台市内の秋保温泉と秋保大滝神社を訪れた。いずれも観光である。

午後には、仙台市内の東北学院大学で開催された「3.11大震災に関わる集い―被災者としての経験、研究者としての経験を共有する」(日本文化人類学会 東北地区研究懇談会2011年度第1回例会)に出席し、東北の各大学における震災への対応についての教員による発表や、地元住民としてボランティアを行った各大学の学生による活動内容や課題・感想についての発表を聞くことが出来た。

帰りは、仙台在住の1人と、引き続き仙台に滞在する1人を除く3人で、往路と同様にレンタカーで東京に戻った。運転は2人で行った。

2.5 後日(5月17・19日)

大学で講義をした際に本活動の内容と特徴についてスライドを用いて紹介し、一次情報に触れる機会を学生に提供した。事前準備(食料・睡眠・休憩の確保、情報収集)の大切さと、当日の作業開始までのいきさつと実際の作業内容などについて紹介した。

3. 活動を終えて

3.1 本活動の特徴

前章では本活動の内容について説明した。そこで本章ではまず、今回の活動を可能にした背景について振り返る。

まず、きっかけについてである。きっかけは面識のある仲間からの誘いであった。そして、それを応援してくれる人から物資の提供があった。さらに、現地でのボランティア経験のある仲間が加わったことで、現地のボランティアセンターの場所や雰囲気を知ることが出来た。また、現地で研究会の開催があったことも、誘因であった。

次に、現地の状況である。現地ではボランティアセンターが整備され、被災者から寄せられるニーズとボランティアの接点となっていたことや、近隣の大都市である仙台市内での宿泊・飲食が可能であったという要因もある。そのため、週末だけ出かけて行って参加することが出来た。作業自体も、著者らは力仕事に慣れてはいないが使用する道具自体は特殊な経験や免許がないと扱えないわけではなかったことも、今回の活動を可能ならしめた要因であった。

このように本活動は、人間関係を介したサポート（経験者とともに行ったこと・現地でフリーのボランティアを捜していたリーダーとの出会い）・行政による受入体制の整備・ボランティア以外の目的の存在（研究会への参加・温泉・授業での紹介）などを背景にもっていた。そのため、非常に少ない負担感のもとで活動することが出来た。

3.2 本活動の位置づけ

以上のように、様々な背景によって可能となった今回の活動であるが、ボランティア活動全体のなかにどのように位置づければよいのだろうか。

これまでボランティアについては活動形態や、領域と対象の観点からの分類が提起されてきた。冒頭で紹介したそれらの分類によってボランティア全体の状況を俯瞰することができるが、相互の特徴はやや不分明であった。そこで最後に、多くの活動形態・領域・対象をもつボランティアの相互の特徴を把握するための軸を提起する。

まず一つ目の軸は、その活動への従事が「定期的・専門的」であるか「不定期的・非専門的」であるか、ということである。もう一つの軸は、その活動に「特殊技能的」なものが要求されるか否かである。

これらの軸に従えば、本活動は、「不定期的・非専門的」であり「非特殊技能的」活動で

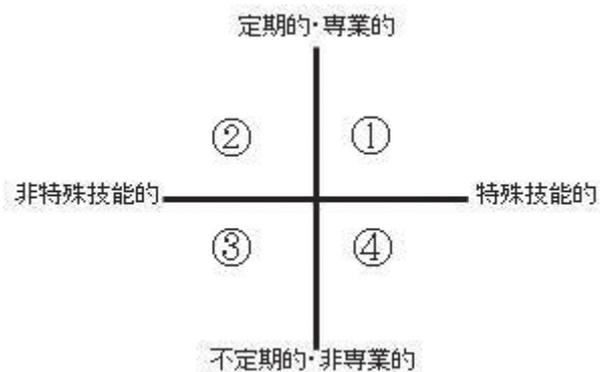


図4 活動頻度と技能の度合いによるボランティアの分類

ある第三象限にあたる。予約等をせずに週末に単発で行ったものであり、通常の体力と水・塩分等の用意があれば誰でもできるものであったためである。

阪神淡路大震災や中越地震を経て根付いてきた災害ボランティアについて考える際や、ボランティア希望者として「自分に何が出来るか／何をしたいか」を事前に自分で整理する際に、こうした図式は有効であろう。ただし、他の象限に位置づけられる活動との関係のあり方については改めて検討を要する課題である。

付記：「ちょボラ」に思うこと

少ない負担感とその他の目的も伴いつつ行った今回の活動は、「ちょボラ」として位置づけることも可能である。「ちょボラ」とは、2001年に公共広告機構（以下、AC）が作った造語であり、「ちょっとした」ボランティアを指す。具体的な分野というよりも、ボランティアへの関わり方に着目した用語である。その点で、本報で提示した図式の作り方と同様の視点に基づいている。

ACのCMでは、具体的なちょボラ行為の後に「ナイスちょボラ！」という言葉が入り、人形が渡される。そこで挙げられているのは、以下のような行為である。

- ゴミ箱の周りに散乱しているゴミを分別して捨てる
- 狭い通路を進む車いす利用者のために邪魔になっている自転車を少しどかさ
- 交通量の多い道路を横断する子どもたちと一緒に渡る
- バスを降りる高齢者に手を貸す

いずれも、日常生活の中で準備や道具なしにわずかな労力で行えてその場で完結する行為である。東北人類学懇談会への参加や温泉への観光など、ボランティア以外の用事もあわせて行っており、非常に負担感が少なかったことは前述した。その点では、今回の活動は「ちょボラ」の一種とも言える。

もっとも、「ちょボラ」という用語とその背後にある考え方に批判がないではない。ACのCMからは、障害者は常に助けられる側としか位置づけられないかのように映るが、例えば車いす利用者でもエレベータに先に乗っていれば「開」ボタンを押すのであり、それは「ボランティア」ではなく「マナーや助け合い」として誰もが行うべき事である、といった批判である⁽³⁾。これは、「ボランティアの受益者」としてのみ位置づけられかねないことの不当性と、「マナーや助け合い」の後退を危惧するものである。私見では、人への手助けを「ちょボラ」とあえて名付ければ行いやすいという点で「ちょボラ」という語の提示は有効であるが⁽⁴⁾、この指摘も無視し得ないだろう。人への手助けを、自発的かつ意識的に「ボランティア」として行うべき事と、無意識的に「マナーや助け合い」として行うべき事の境界がどこにあるのか、何によって影響を受けるのかということも、ボランティア論の今後の課題の一つである。

注および引用文献

- (1) 川村匡由、『ボランティア論』ミネルヴァ書房、2006年2月
- (2) 全国社会福祉協議会「水害ボランティア作業マニュアル - 全社協 被災地支援・災害ボランティア情報」<<http://www.saigaive.com/> 水害ボランティア作業マニュアル /> (2011年9月26日アクセス確認)
- (3) 石川ミカ「障害者は『施し』の対象?」『朝日新聞』、2002年9月29日、17面
- (4) 類似の例として、イラストレーター・エッセイストのみうらじゅんが、「親孝行」をロールプレイや遊びと考えれば気恥ずかしさなしにできると主張して実行した例が興味深い。みうらじゅん『親孝行プレイ』角川書店、2007年4月